

シリーズ

秘蔵写真

今は昔の林業

第39回

中部森林管理局総務課

井上 日呂登

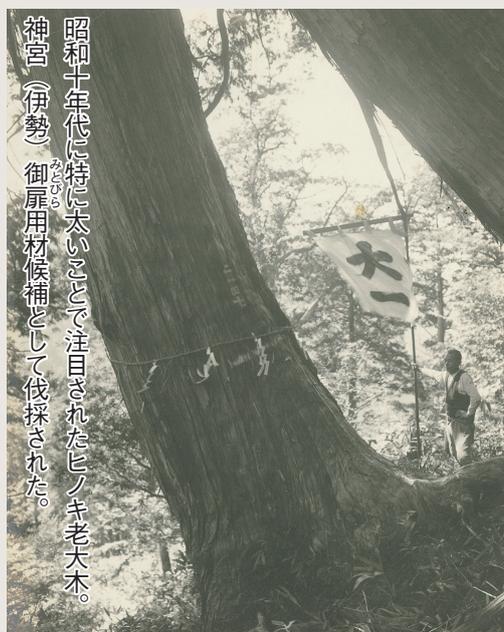
今は昔、山村に暮らす人々とその生業としての林業を当局秘蔵の写真とともにご紹介します。

「裏木曾」その三 大ひのき

江戸前期より強度の伐採が行われた木曾地域に対して、比較的森林資源が残されていた裏木曾は大材の産地として知られていくことになりましたが、かつてどれ程の巨木が存在したのかは今となっては推測するしかありません。

江戸時代後期の江戸城西の丸再建のための

姫路城「昭和の大修理」の際に、城を支える「心柱」用材として昭和三十四年に伐採されたヒノキ巨木。樹高三五メートル、目通り直径一・二メートルとされる。写真に写っている人物と比較することでその大きさが実感できる。



昭和十年代に特に太いことで注目されたヒノキ老大木。神宮（伊勢）御雇用材候補として伐採された。

出ノ小路（現在の東濃森林管理署加子母裏木曾国^い有^こ林）での大材伐出（第二十八回参照）の際に

は「カナテコ」と呼ばれていた樹齢千年以上の伝説的なヒノキ巨木が伐採されています。この「カナテコ」、昭和三十年代に国宝姫路城の「心柱」修理用材として加子母裏木曾国^い有^こ林で伐採されたヒノキ巨木、そして後述する「大ひのき」が記録上残っている特に大きな巨木とされます。

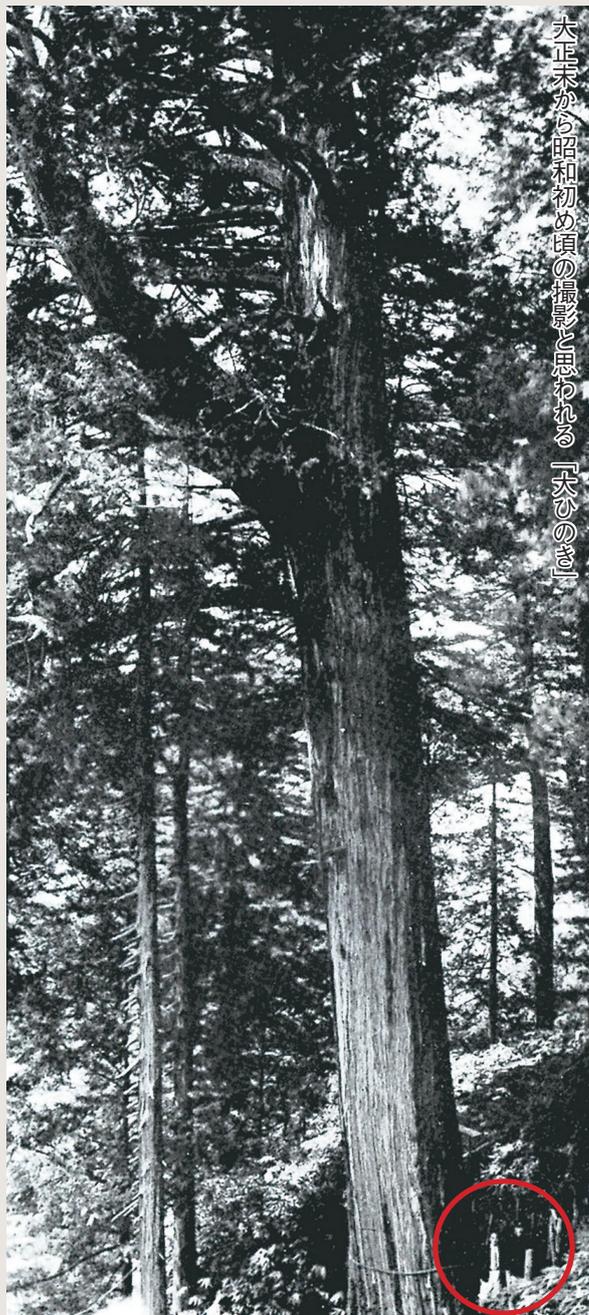
「大ひのき」は江戸時代後期には既に出ノ小路で神木、木曾山随一の巨木と知られていたヒノキであり、樹高二十間（約三六メートル）、目通り（地上一・二メートルの高さ）の周囲長一・二二尺（約七メートル）と記録されています。裏木曾を代表する巨木でしたが、昭和九年九月に室戸台風による暴風で地上一二メートルで折損してしまいました。その後、完全に枯死してしまい昭和二十九年に伐採されました。なお、昭和五十六年に同じ加子母裏木曾国^い有^こ林で巨大ヒノキが発見され、以降「二代目大ヒノキ」と呼ばれています。



昭和九年の室戸台風で折損した「大ひのぎ」



昭和初め頃の撮影と思われる「大ひのぎ」



大正末から昭和初め頃の撮影と思われる「大ひのぎ」

これらの巨木がいずれも加子母裏木曾国有林(出ノ小路)に存在していた訳ですから、まさに「巨木の森」と呼んでよろしいかもしれません。こうした大木が多い特異な森林が形成されたのは、急斜面であり伐採・搬出が困難であったこと、風当たりが弱い地形であること、気候・地質がヒノキ・サワラの生育に適していたこと、江戸時代以降の尾張藩・地元での保護管理が適切であったことなどが理由として考えられています。



官服を着た職員と対比して木のサイズがうかがえる



昭和初め頃の「出ノ小路神宮備林」(現在の東濃森林管理署加子母裏木曾国有林)。帝室林野局でも有数の大材林として名をはせた。

ここで紹介している写真は、当局サイト「モノクロ森林紀行」で紹介しております。これは、カラー写真のない時代へ時を超えて！むかしの写真を紹介するサイトです。当サイトへは、コードを読み込んでください。

